

群の土地利用、個体群動態、遊動におけるスペーシングの問題、オスの群れの離脱等に関する社会関係等の調査を継続している。

4) 猿害の発生とその防止の研究

川村俊蔵・鈴木 晃

農業者にとっても、ニホンザルの保存についても、由々しい問題である猿害について、その発生機序を知り、防止対策を考え、人間とサルとの調和をはかるべく、日本生命財団の助成により、長野県上松町および房総丘陵で資料の採集ならびに防止実験を行った。

5) ニホンザルの個体群の生活の維持に対する森林施業その他の *human impact* の影響の生態学的研究

東 滋

ニホンザル個体群の地域構造や生活のたてかたに与える人為営力の作用を生態学の文脈においてとらえる。もっぱら“自然”の側の反応を、異なる形式あるいは程度で人為の加わった地域間の比較と、同一地域の時系列的変化の追跡により把握しようとする。下北半島の北西部・南西部の2つの地域個体群についての個体群変動の追跡と岐阜県下の天然林地域と“森林開発”のすすんだ地域との調査を行った。

また平行して、おなじ環境変化がニホンザル以外の森林哺乳動物に与える影響についても調査をすすめている。

6) スマトラにおける霊長類研究

川 村 俊 蔵

年報第10巻に紹介した、スマトラ自然研究計画に関し、日本学術振興会の派遣により2ヶ月、トヨタ財団助成のコンサルタントとして3ヶ月の2次にわたりスマトラに赴き、研究室の建設及び5ヶ年研究計画の第1年度としての基礎固めを行った。他に、これまでの継続として、*Presbytis melalophos* のとくに行動面を中心とする地方変異の研究を行い、たまたま生起した人殺し虎事件の資料も収集した。

7) アフリカにおける現生および化石霊長類に関する学術調査

河 合 雅 雄

本調査を科学研究費(海外学術調査)によって行った。特にカメルーン共和国カンボ地区において、星野次郎(大学院生)との共同研究でマンドリルの野外調査を採食生態学的観点から行った。

8) 原猿類の社会生態学的研究

東 滋

1980年度から81年度にかけての1年間、主にマダカスカル、ザイールにおいて野外調査を行っている。

9) アフリカのチンパンジー、その他の霊長類の比較社会・生態学に関するまとめの研究

鈴 木 晃

10) ドリルの生態学的研究

森 梅 代

カメルーン共和国北西部のエジャガム地方で、ドリルの遊動状況、食性、音声活動などについての研究を行った。本調査は丸橋珠樹(大学院生)との共同で行われた。(科学研究費海外学術調査)

総 説

- 1) 河合雅雄(1980): 動物行動学・動物社会学と精神医学。“精神医学”, 上巻(新福, 島蘭編) pp. 122-130, 金原出版, 東京。
- 2) 河合雅雄, 沢田允茂(1980): “動物と人間” 思索社, 東京。
- 3) 鈴木 晃(1980): 房総半島の孤島性とその文化の研究。“冬虫夏草” No.15 pp. 21-43。

論 文

- 1) 鈴木 晃(1980): ニホンザルとチンパンジーのフンの分析。Study of Droppings, 2(1), 11-38。

学 会 発 表

- 1) 霊長類の社会構造の可塑性に関する一考察
鈴木 晃
第34回日本人類学会日本民族学会連合大会(1980)

変 異 研 究 部 門

野澤 謙・和田一雄
庄武孝義・峰澤 満

研 究 概 要

- 1) ニホンザルの集団遺伝学的研究
野澤 謙・庄武孝義・川本 芳¹⁾
ニホンザルの血液蛋白の構造を支配する遺伝子

1) 大学院生

の変異を電気泳動法によって検索し、群内、群間の変異性を定量化する。現在までにニホンザル約40群、総個体数約2,000頭の血液試料について、約80種の蛋白の構造を支配する計32遺伝子座の検索を行った。このデータをもとにして、統計的検討を加え、繁殖単位間の毎代の移出入率、遺伝的変異の散布範囲などについて定量的推定を行い、ニホンザルの繁殖構造を解明すべく作業を続行中である。1980年には第3次集計分を論文化し、投稿した。

2) Macaca 属サルの系統的相互関係

野澤 謙・庄武孝義・川本 芳

ニホンザルを含むMacaca属サル各種から採血を行い、前頁1)と同一の方法によって種内・種間の遺伝学的変異性を定量化し、それら種間の遺伝子構成上の差を遺伝距離で表現し、それに数量分類学的手法を適用して枝分れ図を描く。それにより種間の近縁関係、分化時間の推定等をおこなう作業を目下続行中である。1980年にはインドネシア現地調査によりカニクイザル約400頭分の材料を入手し、目下分析中であり、1981年度には、インドネシア・スリランカにてカニクイザル、トクモンキーの詳細な資料を得るべく調査を行う予定である。

3) ニホンザルの先天的四肢奇形への遺伝的アプローチ

野澤 謙・峰澤 満

ニホンザルの数多くの餌付群に多発する先天的四肢奇形が遺伝的支配を受けているか否かを明らかにすべく研究が続行されている。集団の奇形出現の家族集積性のデータから統計遺伝学的手法を用いて遺伝率の推定を行う他、細胞遺伝学的手法を用いて奇形出現と染色体異常との関連の有無を明らかにする作業を行っている。さらに交配実験は淡路島野猿公園の協力を得て現地で続けている他、モンキーセンターとの共同研究として、宮島から入れた奇形ザルを用いて本研究所においても続行している。

4) 家畜化現象と家畜系統史の研究

野澤 謙・庄武孝義

在来諸家畜とそれらの野生原種の遺伝的野外調査によって、家畜化現象そのものの集団遺伝学的解明と、個々の家畜種内で地域集団間の遺伝的分化の程度、系統的相互関係の解明を行ないつつある。

5) ヒヒ類の種分化に関する遺伝学的研究

庄武孝義・野澤 謙

1978年度の調査により、マントヒヒとアヌビスヒヒの雑種化現象について、前回の資料に追加して詳細な遺伝学的分析を行い論文化、投稿した。また、エチオピア中央高原に生息するゲダラヒヒの集団動態を遺伝学的に分析した。さらには、ドリル、マレドリルの資料を加え、ヒヒ類の遺伝的分化を定量化しつつある。

6) ニホンザルの細胞遺伝学的研究

峰澤 満

ニホンザルの血液を培養し、染色体標本を作成する。これに各種の分析法(G.Q.R.C.N — バンド法)を適用して、標準核型を作成したこれに基づき、ニホンザルの各集団における染色体の変異性を明らかにすべく作業を続行している。

7) ヨザル(Aotus trivirgatus)の核型分化の研究

峰澤 満

日本国内に輸入されたヨザルの血液を培養することにより、染色体標本を作成し、その染色体構成を明らかにする。核型の分化と繁殖成績との関係を把握することにより、核型分化の種分化の関係を考察すべく作業を続けている。

8) 志賀C群の秋期の食物利用調査

和田 一雄

Seed trapによる食物の生産量調査と平行して、糞内容物による食物摂取の種類推定を行った。

論文

1) 野澤 謙(1980)

日本犬の血統分析

在来家畜研究会報告, 9: 155-168

2) 野澤 謙・庄武孝義(1981)

日本在来馬の遺伝子構成とそれに基づく類型化の可能性について

“日本在来馬の類型化について” 日本馬事協会編 pp. 8-72

3) Minezawa, M., Moriwaki, K. and Kondo

K. (1980): The third allele of supernatant isocitrate dehydrogenase of house mouse, Id-1^c, originates from Asian Continent. Jpn. J. Genetics 55: 389-396

4) Minezawa, M., Moriwaki, K. and Kondo

K. (1980): Geographical survey of protein variations in wild population of Japanese house mouse, *Mus musculus molossinus*. Jpn. J. Genetics, 56: 27-39

- 5) Wada, K. and Y. Ichiki (1980): Seasonal home range use by Japanese monkeys in the Snowy Shiga Heights. *Primates*, 21(4): 468-483
- 6) 好広真一, 斎藤好広, 常田英士, 和田一雄, 市来よし子, 福田喜八郎, 鈴木 晃, 山本教雄 (1980): 雑魚川および魚野川流域に生息するニホンザルの積雪期における利用地域, 個体数, 食性. 信大志賀自然研究施設業績, 18: 33-48

学 会 発 表

- 1) ヒトとチンパンジーの遺伝距離
野澤 謙・庄武孝義・川本 芳・田名部雄一
第25回プリマーテス研究会(1981)
- 2) エチオピア中央高原のゲダラヒヒの遺伝的変異性と集団動態
庄 武 孝 義
第25回プリマーテス研究会(1981)
- 3) カニクイザルのタンパク多型
川本 芳, 野澤 謙, Tb. M. Ischak
第25回プリマーテス研究会(1981)
- 4) ニホンザルの奇型に関する研究Ⅱ
細胞遺伝学的研究
峰澤 満・野澤 謙・和 秀雄
四手井綱英・後藤俊二・好広真一
浜田 稔
- 5) ニホンザルの奇型に関する研究Ⅰ
3年間の研究成績
和 秀雄・四手井綱英・野澤 謙
後藤俊二・峰澤 満・好広真一・
浜田 稔
- 6) 志賀A₂群の冬期における空間配置について
(予報)

和 田 一 雄

生 活 史 研 究 部 門

杉山幸丸・小山直樹
大澤秀行・田中二郎*

研 究 概 要

1) ニホンザルの個体群生態学的研究

杉山幸丸・大澤秀行

高崎山を中心とすを餌付け個体群から導き出した人口学的パラメータおよび生命表は, 断片的ながら霊仙山野生群によるデータによって修正され, ニホンザルの生命表として一応のまとめを試みた。野生個体群の生命表作製には更に詳細な資料の追加が必要であり, これまでに行ってきた一時捕獲・標識追跡に加えて, 昭和55年度はバイオテレメトリー法の導入を試みた。一方, 高崎山の餌付け個体群についても, 個体標識追跡によって, 長年月におよぶ通時的履歴の把握を行っている。

2) 狩猟採集民, 遊牧民の生態人類学的研究

田 中 二 郎

1966年以来数次にわたってアフリカの狩猟採集民, 遊牧民についての現地調査を行ってきた成果をまとめ, 農耕や牧畜の食料生産手段, およびそれがもたらす社会構造の諸問題を, 狩猟採集民社会のそれと比較しながら考察を進めている。現地調査については, 北ケニアの遊牧民研究(7月~11月), ボツナワのブッシュマン研究(12月~2月)を行い新たな資料を収集してきた。

3) カニクイザルの社会生態学的研究

小 山 直 樹

6月から11月にかけてインドネシアのスマトラ島パダン近郊に生息する2群のカニクイザルを主対象として, 個体間でみられた社会関係の把握を行った。帰国後, マカカ属に属するニホンザル, ボンネットザル, カニクイザル3種の社会関係, 社会構造の比較研究を行っている。

4) サバンナ生息哺乳類の個体群生態学的研究

大 澤 秀 行

昭和53年度の調査に引き続き, 昭和55年3月より7月まで東アフリカ・ケニア北部のシマウマ等大型・中型草原性哺乳類の社会生態・個体群生態の比較研究を現地で行った。今回はとくにバタ

*) 昭和56年4月1日をもって, 弘前大学
人文学部へ転出